九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

民族運動に對するブルジヨア的指導の限界 : アジアの植民地および半植民地を中心として

具島, 兼三郎
九州大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/14387

出版情報：法政研究. 20 (2/4), pp.145-160, 1953-09-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

民族運動に對するブルジョア的指導の限界

——アジアの植民地および半植民地を中心として——

具島兼三郎

一

アジアの植民地や半植民地の解放運動が目覺ましい前進を開始したのは、ブルジョアジーがこの運動の指導權をにぎるようになつてからのことであつた。それまでというものは、植民地支配に對するアジア諸民族の反抗はくりかえし、くりかえし行われたものの、そのことごとくが失敗に終つた。それというのも無理はなかつた。ブルヂョアジーがあらわれてくるまで、植民地支配に對する反抗の指導權は目先の利かない封建勢力の手に握られていたからである。彼らの視野はきわめて狹隘であつたから、彼らの反抗にはさいしよから大きな歴史的制約が附されていた。初期の反抗は多くの場合、ヨーロッパの資本主義がアジアを征服するまでアジアを支配していた人々、すなはち王侯、貴族、僧侶などの手によつて指導された。彼らはヨーロッパ勢力の侵入とともに彼らの土地や財産をとりあげられ、彼らの特權を制限ないし剝奪され、彼らの權威を損われたことに對して、ひじような憤懣を抱いていた。そのためにその憤懣が抑えきれなくなると、彼らはしばしばそれを叛亂という形で爆發させた。叛亂に際しては彼らの身分的ないし宗教的權威にものをいわせて、失意の農民や沒落した手工業者を狩り集め、放火、殺戮、掠奪をほしいまゝにして、日頃の憤懣を晴らした。しかし、彼らの叛亂はもともと彼らの失われた土地や財産や特權を回復することが目的であつて、農民を解放することが目的ではなかつたから、農民に魅力のあるスローガンをかゝげて廣汎な農民を彼らの周

圍にひきつけることはできなかつた。いなそれどころか、さいしよ彼らの麾下に集つた農民でさえも、叛亂が進むうちに、しばしば彼らの手に負えなくなることがあつた。農民たちにしてみればもとより彼らを苦しめる植民地支配に對しては、抑えがたい反感をもつていた。それなればこそ彼らも叛亂に參加したのであつた。しかし、彼らが反感をもつていたのは植民地支配に對してだけではなかつた。彼らは亦彼らを苦しめる封建的な諸關係に對しても反感をもつていた。そのために農民たちは武器を手にして叛乱に參加すると、その機會に日頃腹にすえかねていた諸問題を解決しようと試みた。彼らが叛亂のどさくさまぎれに地主の土地を沒收したり、高利貸を脅迫してその債務を破棄したりしたのはそのためであつた。こゝまでくると、農民とその封建的支配者たちとの關係は、融和しがたいものとなつた。王侯、貴族、僧侶など、封建時代の支配者たちにとつては、封建制度そのものは少しもわるいことはないのであつた。いな、わるくないどころか、外國資本主義の侵入によつてその基礎がゆらぎはじめたので、それをもう一度以前のように確固たるものにしようというのが彼らの念願であつた。彼らが植民者たちに對して叛亂をおこしたのもそのためであつた。しかるに農民たちはしばしば彼らのこうした意圖を乘り越えて前進した。そこで農民たちがそのような行動に出たところでは、彼らは動搖し、二の足をふんだ。彼らは叛亂の前途に大きな不安を抱き、できれば大抵のところで叛亂を打切りたいと考るようになつた。そんなときヨーロッパ植民者たちの側から一寸好餌を示して誘いがかけられると、彼らはもう前後のわきまえもなくそれにとびついていつた。そして今度は植民者たちに手を貸して、いままで自分と行動をともにした農民たちを逆に抑えにかゝるのであつた。もとよりなかには最後まで外國の植民者に對して戰うものもあつたが、彼らとても政黨のような組織をもつていたわけではなかつたから、一定の綱領政策をかゝげてひろく大衆によびかけ、これを教育訓練して斗爭に從わせるといつたような器用な藝當はできなかつた。また各地におこつた叛亂を連繫してそれらを一つの指揮のもとに統一するというようなこともできなかつた。加うる

に身分制度のやかましい彼らの社會では、身分の下のものが上のものを指揮したり、身分のちがうもの同志が肩をならべて仝じ仕事に從事したりすることはできなかつたので、適材を適所に用うることができなかつた。それに身分制度の社會につきものの縄張り爭いは絶えなかつたし、武器彈藥は貧弱であつたし、輸送通信の施設もまた幼稚なものであつたから、その戰力をうまく組織することができなかつた。これらの原因がかさなり、かさなつて彼らの勇戰奮斗も水泡に歸し、彼らの叛亂はことごとく失敗した。

王侯、貴族、僧侶など封建社會の支配階級とちがつて、封建社會の被支配階級たる農民が反抗の先頭に立つたところでも結果は同じであつた。しかし、農民の場合には王侯、貴族、僧侶などとちがつて、封建制度のもとでいぢめ拔かれてきた階級であつたから、封建制度そのものに對しては反感をもつていた。したがつて農民が先頭に立つて暴動をおこしたところでは、しばしば封建制度の否定が前面に押しだされた。例えば中國の太平天國の亂（一八五〇―一八六四年）では、宗教的ヴェールに包まれた形においてではあつたが、封建制度の否定がすでに指導者たちの意識の上にのぼされていた。そこには封建的地主制度の否定を意味する土地平分の思想があり、また封建的社會關係の否定を意味する男女の平等や賣買結婚、蓄婢納妾、纏足の禁止があつたからである。このように封建制度の否定を前面に押しだしたことは、王侯、貴族、僧侶などの指導のもとにおこされた叛亂に比して、たしかに大きな進歩であつたが、それにもかゝわらず農民が先頭に立つた叛亂にはやはり限界があつた。彼らは都市の工場勞働者などとちがつて、その勞働が分散的な形でおこなわれ、各自勝手氣儘にやつているために、一般に規律を重んぜず、組織性に欠げていた。そのためにせつかくいゝ考えが浮んできても、それを一般にひろめたり、實行に移したりする方法がきわめて拙劣であつた。これでは大きな力をつくりだすことができなかつた。太平天國の場合でも洪秀全をはじめとして指導者層の前記の考えを實行に移すことができたならば、當然に多くの農民たちの共鳴を克ちえたはずであつたにもか

かわらず、それを農民の間にひろめたり、實行に移したりする組織が欠げていた。そのために太平天國の運動が小範圍にとゞまつていた間は、指導者層の考えも或るていど實行されたが、その運動がひろがりを增すにつれてその實行は拋擲してかえりみられなくなつてしまつた。そのために末端の方になると、太平天國の運動といつても、それが何のための運動やらわからなくなつてしまつた。これでは運動を擴大し、强化することはできなかつた。太平天國が失敗した原因の一つは正にこゝにあつた。農民たちは非組織的であつたばかりでなく、またきわめて近視眼的であつたから、そのためにしばしば運動の正しい方向を見失うことがあつた。例えばインドネシヤでは、オランダの植民者達は華僑を使つて徵稅をやらせていたが、そのとりたてかたがあまりに苛酷であつたために、インドネシヤ農民たちの間からはよくこれに對する反抗がおこつた。ところがその場合農民たちの反抗の鉾先は彼らの眞の搾取者たるオランダの植民者たちに向けられるかわりに、直接彼らの門口に立つ華僑に向けられることが珍らしくなかつた。このような見當ちがいはオランダの植民者たちが狡る賢く立ち廻つて、あたかも彼らが農民たちに對して同情をもつているかのごときゼスチヤーを示したりするといよいよ拍車をかけられた。それによつて農民たちは彼らの眞の搾取者が誰であるかを見失つた。また外國資本主義に對して或るていど正しい認識をもつていたものでも、それと國內の封建的な支配者層とがどんな關係にあるのかということについては、かならずしも明確な認識をもたなかつた。例えば中國の義和團暴動などはその典型的なものであつた。義和團暴動は外國資本主義に對する中國農民の自然發生的な反抗であつたが、全時にそれは清朝政府の壓政に對する反抗でもあつた。しかし義和團と外國資本主義との衝突が激化すると、清朝政府はあたかも義和團に同情をもつているかのごときゼスチヤーを示した。そのために義和團はすつかりだまされて「扶清滅洋」のスローガンをかゝげ、清朝政府に對する斗爭を停止した。しかるに清朝政府は義和團を煽動して外國資本主義を攻擊させ、義和團が外國資本主義の優勢な武力の前に粉碎されると、こんどはまた外國資本主義と妥

協し、その手先となつて前よりももつとひどく農民たちを搾取するようになつた。外國資本主義が植民地を支配する場合には、常にその地域の封建的支配者層の一部を手馴け、彼らを自己の手先としてその支配をつゞけるのが常であつたから、外國資本主義と國内の封建的支配者層とを別々にひきはなして考えること自体が間違いであつた。ところが近視眼的な農民にはこのことがなかなかわからなかつた。

以上の事實が示しているごとく、植民地支配に對する反抗は、それが王侯、貴族、僧侶などによつて指導された場合でも、農民によつて指導された場合でも、それを成功にみちびくことはできなかつた。植民地支配に對する斗爭を有効に組織するためには、まず封建的な諸關係を廃絶することが必要であつたが、そんなことはこれまでその上に安住してきた王侯、貴族、僧侶など封建時代の支配階級にできることではなかつた。農民の場合にはこのことはかならずしも不可能なことではなかつたが、彼らはきわめて近視眼的であり、非組織的であつて、それを實行に移すための有効な手段を欠いでいた。そのために解決の手蔓をつかみながらも、それをトコトンまでおしすゝめることができなかつた。

しかし、アジアの植民地や半植民地に土着の資本主義が成長し、ブルヂョアジーが植民地の解放運動を指導するようになると、事態は急激に變つてきた。アジアの植民地や半植民地のブルヂョアジーは、その誕生の當初から外國資本のために目にあまる差別待遇をうけてきたので、植民地支配に對してはいずれも強い反感をもつていた。外國の植民者たちは植民地に土着の資本主義が成長して、それが本國資本と競爭的關係に立つことを好まなかつたので、彼らはあらゆる方法を用いて土着資本主義の成長を妨害した。その半面本國資本の植民地進出を容易にしたり、植民地の鑛產資源や農產物の收奪を促進したりするためには、萬全の策を講じた。彼らにとつては本國資本のために植民地の資源や勞働力を確保したり、本國商品のために植民地の市場を獨占したりすることだけが目的であつたから、植民地

の土着資本の利害など眼中になかつた。そのために本國商品と競爭的關係に立つ植民地商品の本國への輸入に際しては禁止的な高率關稅を課しておきながら、同じ商品の植民地への輸入に際しては本國商品に對する關稅をひきさげたり、免除したりした。又植民地に進出した本國資本は植民地政府によつて各種の特權をあたえられ、土民からとりあげた稅金の一部を補助金という形で與えられた。これに反して植民地の土着資本は各種の不利な法令でその頭を抑えられ、活動の分野を制限された。ときに植民地政府から補助金を與えられることもあつたが、それは植民者にとつて何か利益がある場合に限られた。それ以外のことで補助金が與えられる場合には、その金額はたゞ申譯だけに止つた。植民地の本國資本は植民地政府によつて各種の特權を與えられたばかりでなく、金融の面からも手厚い保護をうけた。これに反して土着資本のこの面で受けた恩惠はきわめて薄かつた。そのために經濟恐慌などがおこると、土着資本の倒產は相ついだ。また土着資本は植民者たちのために植民地とは全然關係のない戰爭の負擔を負わされることもあつた。このほか植民地で港灣や鐵道、道路、飛行場などの建設がおこなわれたり、ダムの築造がおこなわれたりすることもあつたが、それらはすべて本國資本の利益を中心に計畫され、實施された。しかも、その費用は植民地の土民に負わされた。土着資本にとつて我慢のならぬことはまだあつた。それは植民者による彼らの待遇の問題であつた。植民地の土着ブルヂョアジーはたくさんの金を使つて外國に留學したり、近代教育をうけたりしても、彼らの學歷にふさわしい待遇をうけることができなかつた。彼らは植民地の土民であるというたゞ一つの理由のために、全一學歷をもつた植民者たちに比して不當にわるい待遇に甘んじなければならなかつた。このような差別待遇は本國資本との競爭條件を改善することによつて自己の經濟的地歩を强化しようとする土着ブルヂョアジーの熾烈な要求と相俟つて、彼らを植民地支配との斗爭に驅り立てた。

しかし、植民地支配との斗爭は植民地を支配している外國資本と斗爭するだけでは不充分であつた。外國資本が植

民地を支配する場合にはかならず植民地の封建的支配階級たる王侯、貴族、僧侶、大地主などとむすびつき、これらを自己の手先として利用するのが常であつたから、國内の反封建斗争を拔きにして植民地支配に對する斗争を有効に組織することはできなかつた。たとえ外國資本との関係がないとしても封建的諸關係の存續は植民地のブルヂョアジーが伸びあがるための桎梏となつたから、それをそのまゝにしておくことはできなかつた。原料資源や土地や勞働力を自由に手に入れるためにも、彼らの生産物の自由な移動を保証するためにも、不當な課税や貢賦から免れるためにも、彼らの生命や財産を身分制度に基礎をおく不合理な干渉から守るためにも、封建制度の打破は彼らにとつて是非必要なことであつた。いわんやそれが外國資本の手先になつて彼らを苦しめ、外國資本に對する彼らの競爭條件を悪化させるにおいておやであつた。かくてインドやインドシナ、インドネシヤなどでは土侯に對する斗爭が、また中國においては清朝政府に對する斗爭が、ブルヂョアジーにとつての重要な課題となつた。植民地支配に對する斗爭が封建制度を廢棄することなくして不可能なことは、植民地支配に對する封建勢力の反抗の歴史がこれを示していたが、この重要な課題がブルヂョアジーによつてとりあげられるとともに、アジアの植民地や半植民地における解放運動は異常な活況を呈するに至つた。ブルヂョアジーは封建制度と斗うことなしには自分自身伸びあがることのできない階級であつたからである。

二

ブルヂョアジーの登場とともに植民地解放運動の戰略戰術の上にも、ひじような進歩がみられた。それまでの運動は封建的勢力によつて指導されていたために、ひろい視野を欠ぎ、各地バラバラで、斗爭の方法もまつたく行き當りばつたりの感を免れなかつた。運動のスケールにしても地方的、局部的なものが多く、また運動のために動員する人

の問題にしても、不平不滿の徒が自然に集るのを待つだけで、大象を敎育し、訓練して、これを運動のために動員してゆくといつた式の方法はとられなかつた。しかるに、ブルヂョアジーが解放運動の指導權を握るようになると、運動はひろい視野をもつようになり、各地の運動が統一され、斗爭の方法にしても意識的、計畫的となつた。運動のスケールにしても地方的、局部的なものから全國的、民族的なものとなり、また運動のために動員する人の問題にしてもたゞ不平不滿の徒が自然に集るのを待つだけでなく、積極的に大衆に働きかけ、これを敎育訓練して運動に動員してゆくという方法がとられるようになつた。もつとも、ブルヂョアジーにしても彼らが誕生した當初からこのような方法に熟達していたわけではなかつた。彼らの間にも當初の間はいろいろな幻想があつた。例えばフイリツピンの土着ブルジョアジーの代辨者、リサール（Jose Rizal）がスペイン植民地政府に進言し、その「善意」に依據してフイリツピンのブルヂョア的改革を行わうとしたごとき、また中國において廉有爲や梁啓超が光緒皇帝を擁して上からのブルジョア革命を行わうとしたごとき、これを示していた。しかし、植民地政府やそれと結托した封建勢力の「善意」に依據して改革を行わうなどという試みがいかにはかないものであるかは、間もなく明かになつた。植民者は强制以外の方法でそのやりかたを變えるものではなかつた。そうとわかつてみると、植民者に對する强制をいかにうまく組織するかが重要な問題となつた。

植民者に壓力を加えるためにはブルヂョアジーだけの力では駄目であつた。しかし植民地支配に對して反感をもつている一切の勢力、なかんずく勞働者や農民を彼らの旗のもとに糾合することができるならば、ひじように有力になること受け合であつた。こゝにおいて大衆工作というものがブルヂョアジーによつて眞劍にとりあげられるようになつた。しかも、ブルヂョアジーは大衆工作を實踐に移すための物質的手段とえい智とを兼ねそなえていた。アジアの植民地や半植民地にブルヂョアジーが登場した頃は歐米諸國では資本主義がすでに帝國主義の段階に入り、資本の輸

出がさかんになつていた頃であつたから、アジアにもこれら諸國の資本が輸出されて、鐵道、道路、通信施設の建設が活潑に行われていた。それらはもとより第一義的には外國資本の利益を中心に建設されたものであつたが、植民地や半植民地のブルヂョアジーにしても、その全然餘惠にあずかりえないわけではなかつた。彼らは外國資本によつてつくりだされた鐵道や道路や通信施設を、こんどは逆に外國資本に對する斗爭のために利用しはじめた。交通通信施設の發達はそれまで地域的に隔絶して相互に意思を疎通させることのできなかつた人々の意思を疎通させ、同一歩調のもとに行動することを可能ならしめた。またブルヂョアジーは彼らが受けた近代教育を通じて歐米の自由主義や民主々義の何たるかを知り、大衆工作における政黨の重要性についても知つていた。そこでアジアの植民地や半植民地のなかでもブルヂョアジーの力の強くなつたところでは政黨がつくられ、「反帝」、「反封建」の綱領政策をかゝげて、植民地大衆への働きかけが始つた。このようにして運動が大衆の間にひろがり、「民族運動」としての形をとりはじめると、その威力もまた以前の分散的な反抗運動とは比較にならぬほど大きなものとなつた。いままで失敗の連續であつた解放運動は、ようやく少しずつ成果をおさめるようになつた。

インドではイギリスのダファリン總督（Dufferin）がインド人の反英氣運を宥和するために自ら指示を與えてつくらせたインド國民會議派（Indian National Congress）がインド・ブルジョアジーの指導の下に次第に反英民族統一戰線に發展し、しばしばイギリスの植民地支配を脅かした。中國ではさいしよ「興中會」、「光復會」、「華興會」などと分散的な形をとつていたブルヂョアジーの革命團体が後に「中國革命同盟會」に統合され、さらにそれが「中國國民黨」に發展して、中國における民族解放運動の推進力となつた。インドや中國を除くアジアの植民地諸國においても、ブルヂョアジーの登場とともに民族運動は漸次活氣をおびてきた。フイリツピンではブルヂョア的な民族運動の口火は十九世紀の末葉早くもリサールによつて切られたが、その傳統はスペインの支配がアメリカのそれにとつて

代られた後は、「ナショナリスタ」（Nationalista）によつて受けつがれた。インドネシヤでは廿世紀のはじめ土着貴族や小ブルヂョア層によつて「ブデイ・ウトモ黨」が、また反華僑的な土着商人を中心として「イスラム商業同盟」がつくられたのを皮切りに、その後は續々と小ブルヂョア政黨が結成された。そのような情勢の中から「イスラム同盟」（サリカツト・イスラム）やインドネシヤ國民黨、インドネシヤ教育黨、大インドネシヤ黨などがあらわれ、民族解放運動のうえでそれぞれの役割を果した。インドシナの場合には中國と國境の接していたために、この國の民族解放運動もまた中國の影響をうけることが多かつた。こゝでは潘佩珠（ファン・ボイ・チョウ）を指導者とする「ヴエトナム光復會」がコーチシナのヴエトナム資産家に働きかけ、彼らの經濟援助をバックとして解放運動に邁進したが、その傳統は後に「ヴエトナム國民黨」によつてひきつがれた。このようにして民族解放運動はアジアの各地において躍進し、幾多の部分的勝利をおさめた。なかでも中國における辛亥革命の成功や國民大革命の進展は世界を驚倒させた。

民族運動の指導者として植民地ブルヂョアジーの果した役割は、たしかに偉大であつた。ブルヂョアジーの指導によつてアジアの民族解放運動は大きな前進を示したからである。しかし、それにもかゝわらず、彼らの指導をもつてしても亦、運動はさいごのゴールに入ることができなかつた。彼らもまた彼らに課せられた歴史的制約のために、一定の線以上に前進することができなかつたからである。先にも述べたごとく、植民地解放運動を民族的な規模にまでひろげ、それに大衆運動としての形態を賦與したことは、何といつてもブルヂョアジーの功績であつた。しかし、この場合われわれが忘れてはならないことは、ブルヂョアジーによつてはじめられた大衆運動はブルヂョアジーの階級的利益に奉仕すべきものであつて、それを否定するものであつてはならないという制約がついていることであつた。大衆運動といつても自由に大衆の赴くまゝに任せることは、ブルヂョアジーにとつて困るのであつた。大衆運動はブルヂョアジーの利益という見地から嚴格に規律される必要があつた。この点でわれわれにとつて興味があるのはイン

ドのガンヂー主義であつた。ガンヂー主義の戰術は「非暴力、公權不服從」の形をとつたが、これこそ大衆運動に對するブルヂョア的指導の典型的なものであつた。

ガンヂーというと、人はすぐあの古ぼけた手紡車のことを思いだし、彼を時代錯誤的な機械破壞運動者の亞流であるかのごくいう。しかし、彼は決して機械破壞運動者でも何でもなかつた。彼の身邊にはいつも神秘の靄がたちこめ、彼の行動は宗教の煙幕に蔽われていたので、人はしばしば彼の本質を見うしないがちであつたが、それにもかゝわらず彼は紛う方なきインド・ブルヂョアジーの代弁者であつた。彼に時代錯誤の惡名を與えた手紡車の奬勵でさえもこのことと矛盾するものではなかつた。一九二〇年度における國民會議派の大會はガンヂーの主導のもとにスワデシ（國産愛護運動）の決議を行つたが、この決議はガンヂーによる手紡車奬勵の眞の意圖がどこにあつたかを遺憾なく說明しているからである。決議文の一節には次のごとく述べられていた――

「國民會議は綿製品に關してスワデシを廣汎に採用することを勸告する。そして內地資本によつて運轉さるゝ、またはその統制下にある現存工場は、國民の需要に應じうるだけの綿糸布を生産しえないが故に――勿論かゝる狀態がそう永くは續きはしないであろうが――本會議は、各戸における手紡ぎと、傭ひ手を欠いだために仕事を放棄した幾百萬の手織工とを增加して、今後大規模に生産を奬勵すべきことを勸告する。」(註一)

註(一) Joan Beauchamp, British Imperialism in India, Martin Lawreuce, London, 1934 ジョアン・ボーチャン著、松原宏譯「イギリス帝國主義下の印度」、叢文閣、昭和十年、一九七―一九八頁參照

すなわち、これによると、彼によつてなされた手紡車の奬勵も、實はインド・ブルヂョアジーのためのものであつたことがわかる。手紡車の奬勵によつて國內生産力の不足を補うことなしには、インド・ブルヂョアジーの熱望するイギリス商品のボイコットでさえも効果的に行いえないという認識が、彼をしてインド國民に對し手紡車の奬勵を行

わせたのであつた。したがつてガンヂーがインド・ブルヂョアジーの代辨者たることに間違いはなかつた。そのガンヂーは民族運動の戰術として暴力を用うることを嚴禁した。何故であつたか？　大衆に暴力の行使をみとめるということになると、その暴力はイギリス資本に對して向けられるばかりでなく、インド・ブルヂョアジー自身に對しても向けられるおそれがあつた。大衆は外國の搾取者に對して憤懣をもつていたばかりでなく、國内の搾取者に對してもまた憤懣をもつていたからである。そこで「非暴力、公權不服從」ということにしておけば、インド・ブルヂョアジー自身は少しも被害をうけることなく、しかもイギリス資本に對しては大きな打擊を加えうるので、ひじように都合がよかつた。インドの國民が稅金の支払いを拒否したり、政府の禁令を犯して塩をつくつたり、英國商品のボイコットをしたりしても、それが暴力を伴わないレヂスタンス、すなはちサチヤグラハ運動に止まつているかぎり、それはインドのブルヂョアジーにとつて利益であつた。しかし、現實の問題としては、インドの大衆はしばしばガンヂー主義の線を乘り越えた。ガンヂーがインドの大衆に對していかに暴力の使用を禁止しても、イギリス帝國主義の側ではインドの民族運動に對して容赦なく暴力を用いたので、インドの大衆の方でも暴力を用いてこれに抵抗するものがあらわれたからである。大衆のなかには日頃から彼らの憎惡の的になつていた警察署を襲擊したり、警官を殺したりするものもあらわれた。また大衆のなかには團結の力にものをいわせて、インド政廳に對する租稅だけでなく、インド人地主に對する小作料の支払いを拒否したり、その土地を占領したり、インド人高利貸への債務を破棄したり、インド人工場主に對してストライキをしたりするのもあらわれた。このような傾向が一寸でもあらわれたときには、そうした傾向の擴大をおそれたガンヂーはたゞちに不服從運動の停止を命じた。そのためせつかく昂揚した民族運動が大混乱に陷り、それを轉機として運動が衰退に向うということも一再ならずあつた。ガンヂーのそのような指導が大衆の憤激を買つたときには、ガンヂーは引退を聲明して政界の第一線から退いた。しかし、インドのブルヂョアジー

がイギリスの支配下にあつて權力斗爭を行つていた第二次世界大戰前までの情勢のもとでは、ガンヂー主義の基本線はインド・ブルヂョアジーにとつて魅力のあるものであつた。そこで何かむずかしい問題がおこると、彼らはきまつてガンヂーを政界の表面に引つ張りだした。

ところが第二次世界大戰後になると、そのガンヂーでさえも、インド・ブルヂョアジーにとつて不要となつた。戰爭中から戰後にかけてインドの勞働者や農民が異常な政治的成長をとげ、政治的ゼネ・ストや農地の占領、テブハガ運動（小作料を三分の一にひきさげる運動）というような形で彼らの勢力を誇示しはじめると、インドのブルヂョアジーは彼らがそれまで唱えていたインドの統一獨立を犧牲にしても、早く權力をにぎる必要を感じた。インドの植民地支配を別の形で繼續したいと希つていたイギリス帝國主義は、インドの分割獨立を望んでいたし、回教徒地主もまた彼らの封建的特權を保持するためにそれを望んでいたので、統一獨立を犧牲にしさえすれば、權力に近付く機會は目の前にぶら下つていた。そうなると、これまで統一獨立のシンボルであつたガンヂーは、もはやインドのブルヂョアジーにとつて桎梏と化した。そこで彼らはガンヂーをふり棄てて權力への道を急いだ。分割獨立によつて權力をにぎつた後のインド・ブルヂョアジーは、彼らがかつて唱えた「非暴力」のことなどケロリと忘れてしまつて、いまでは國內の勞働者や農民の革命運動に對して、しきりに「組織された暴力」を行使している。勞働者に對する各種の彈壓法（產業安全保障法、予防拘禁法、勞働組合法、勞働關係法）が次々に發布されたり、テレンガナの農民運動の鎭壓のために軍隊が派遣されたりしたごとき、これを示している。インドのブルヂョアジーは今日ではもうイギリス資本と徹底的に斗う意思もなければ、國內の土侯や地主に對して戰を宣する考えもない。いな、それどころか、むしろ彼らに握手の手をさしのべ、彼らの援助をさえ期待しているのである。したがつてインドの重要產業部門には依然としてイギリス資本が盤據し、國內ではこれという社會改革も行われていない。そのためにインドの國民生活は依然と

して植民地的低水準にとゞまつている。

中國の民族運動におけるブルヂョアジーの戰術は、インドのそれとは大いに趣きを異にしていた。こゝでも民族運動が大衆運動として展開されたことは仝じであつたが、こゝではガンヂー主義がインドの大衆運動に課したような制限は課せられなかつた。こゝでは大衆の暴力は禁止されるかわりに、組織化された。このことはロシヤ革命の影響が中國に傳つてから、とくに顯著になつた。中國ブルジョアジーの代辨者であつた孫文がソ連の勸說にもとずき、黨軍の建設にのりだしたことはこれを示している。しかし、孫文の死後彼の宿願であつた「北伐」が實行に移されたとき、かつてインドのブルヂョアジーを脅した幻影が、こんどは中國のブルヂョアジーを脅しはじめた。北伐の過程において盛りあがつてきた勞働者、農民の勢力は、もしもそれを發展するがまゝに任せておいたならば、やがてブルジョアジー自身の指導權さへも奪いかねない性質のものであつた。こゝにおいて彼らは一九二七年四月當時の北伐軍司令官蔣介石の尻を叩いて上海に大クーデターをおこさせ、勞働者や農民の勢力が强くなりすぎないうちにその出鼻をくぢいたのであつた。勞働者や農民を敵に廻す以上外國帝國主義や國內の封建軍閥とは妥協する以上、植民地支配の打倒など思いもよらなかつた。外國帝國主義や國內の封建軍閥と妥協する以上、植民地支配の打倒など思いもよらなかつた。したがつてせつかくそれまで破竹の勢ですゝんでいた民族解放運動もこゝで挫折した。そして戰後中國のプロレタリアートがブルヂョアジーに代つて民族解放運動の指導權をにぎり、運動を成功にみちびくまで、中國は依然として世界の半植民地たる地位にとゞまつた。

仝じような事實はアジアの他の地域においてもみられた。インドシナにおいて潘佩珠の運動がいつの間にかフランス資本との妥協に傾いたのも、またフィリツピンにおいてナショナリスタの運動がアメリカ資本との妥協に走つたのも、その原因はやはり五十步百步であつた。これらの事實はアジアの植民地や半植民地においては、ブルヂョアジー

もまた民族解放運動の指導者としては不適當であることを示した。ブルヂョアジーが自分の背後に迫る勞働者や農民の勢力を感じて急にいままで斗つていた敵と妥協するというような現象は、何もアジア植民地や半植民地だけに限つた現象ではなかつたが、これらの地域においてとくにそうした傾向が強いのには、やはりそれだけの理由があるのであつた。

三

わたしはその理由を次の諸點にあると考えている——

一、アジアの植民地や半植民地ではブルヂョアジーの多くは地主出身であつて、西歐の資本主義興隆期のブルヂョアジーに比して一般に土地とのむすびつきが深かつた。彼らはブルヂョアジーであるとともに地方大地主であるものも多かつたので、封建的諸關係の一掃はかならずしも彼らに利益だけをもたらさなかつた。そこでとかく地主や封建領主との妥協に傾きがちであつた。

二、アジアの植民地や半植民地ではひじようにに工業の發達がおくれ、民族工業が發達していないか、發達していても、資本の面で外國資本との合辨という形をとつているものがあつた。そのような情勢のもとで外國資本に對して徹底的な斗爭を行うことは、自分自身の企業を破壞するようなことになるので、ブルヂョアジーの斗爭はどうしても中途半端なものにならざるを得なかつた。

三、アジアの植民地や半植民地のブルヂョアジー、なかんずく大ブルヂョアジーは外國資本との商業的關係や外國資本からの金融的援助、植民地政府の懐柔政策などのために毒されて、しばしば買辨的性格をおびていた。インドのタタ財閥やダルミア財閥がイギリス資本やイギリスのインド政廳の庇護をうけて成長してきたために大英帝國から離

脱を望まなかつたこと、革命前まで全中國を支配していた蔣、孔、宗、陳四大財閥がイギリス資本やアメリカ資本の援助のもとにその支配を維持してきたために、反帝斗爭に關してきわめて不熱心であつたことなどは、これを示している。

アジアの植民地や半植民地のブルヂョアジーは、もともとこのような弱點をもつていたのである。それが勞働者や農民の勢力の擡頭とともに地金をあらわしたにすぎない。しかし、アジアの民族解放運動は民族解放運動が當然に敵としなければならないものに對して希望をかける人たちによつて指導されることはできなかつた。民族解放運動の指導權がブルヂョアジーの手からすべりおちて、いまでは彼らを乘りこえてすすもうとする勢力の手に移つてしまつたのはそのためであつた。